

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25870079

研究課題名(和文)1960年代の文学と視覚メディアの交錯についての文体論的研究

研究課題名(英文)Stylistics for the intersection of literature and visual media of the 1960s

## 研究代表者

高橋 由貴 (TAKAHASHI, YUKI)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：90625005

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：グラビア誌面調査と主な作家のルポルタージュや旅行記調査によって明らかにした1960年代の文学の傾向を踏まえ、大江健三郎のエッセイ・小説における文体の検討を行った。特に1960年代の視覚メディアによる「知的概観的世界」(三島由紀夫)に対抗すべく、大江文学のフランス・ユマニズムを受容した独自のスタイルを論じた。また、上記の調査・検討を基として、戦中期の太宰治、戦後の原民喜、ベトナム戦争を小説化する村上春樹の試みなど、時代を拓げてメディアに抗する小説スタイルを検討した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this project is to clarify a literature trend of the 1960s by investigating gravure and reportage. Then I examined the improvement of the style of Oe Kenzaburo, and discussed that Oe Kenzaburo's novels accept French humanism. In addition, the style of the writers who opposes photogravure was investigated, making Dazai Osamu, Hara Tamiki, Murakami Haruki into an example.

研究分野：日本近代文学

キーワード：文体論

## 1. 研究開始当初の背景

安保闘争と学生闘争に挟まれた 1960 年代が「政治の季節」であることに間違いはないが、それが「メディアの季節」でもあったことは看過されがちである。1960 年代に闘わされた「政治と文学」論争と、視覚メディアがもたらした社会の大衆化は、これまで文学的事象と文化的事象として別々に論じられてきた。本研究は、政治運動が盛り上がり、次第にその政治的な主体が切り崩されていく過程を、1960 年代独特の文学 / 文化をめぐる状況に求めるものである。なぜならそれは、「政治の季節の終焉」と呼ばれる 1970 年代を迎える流れを支えた視覚メディアと文学の異種混濁の状況であると考えられるためである。

1950 年代のニューメディアは、1960 年代に入り、グラビア入り週刊誌、娯楽映画や記録映画の隆盛、テレビの普及とテレビ番組の多様化と、視覚偏重に力を得て新たな位置を確立し、社会の大衆化をもたらす。この大衆化社会は、思想の対立を無効化し、高度経済成長を支える生活保守主義を加速度的に生み出した。文化の抵抗性の失効と、文学・文化にまつわる画定領域の流動化をもたらし、70 年代から現在に至るまでのサブカルチャー全盛期を用意する。1960 年代を転換期として、文化環境の中で文学をめぐる位置が変化・変容したのは、文学とニューメディアの複雑かつ重層的な「交錯」と言う他ない関わりに拠る側面が大きい。

本研究は、視覚偏重のメディアの登場による文学環境の変化が、他方でメディアを受容した小説様式・文体を生み出し、政治的なものへ向かう文体武装を行うという、この二つの潮流を文学 / 文化という枠組を乗り越えた形で把握するものである。

## 2. 研究の目的

本研究は、以下の(1)～(3)を明らかにする。

(1) メディアを受容する文学 (= 政治に接近していく文学) の検討

1950 年代後半～60 年代に活躍する大江健三郎・三島由紀夫、石原慎太郎、開高健の文体を考察し、彼らがメディアに接近し、文体武装によって社会へのコミットしていく過程を辿る。大江「性的人間」「叫び声」、三島「憂国」、開高「輝ける闇」等、視覚メディアを取りこむこれらの小説における主体の自己完結性には常に亀裂が生じており、これは文学者自身が作家としてこの時期のニューメディアとどのようにつき合うかという問題と並行して考えていくべきであると考えられる。

(2) 1960 年代に出版・作成されたメディア (週刊誌および記録映画) の調査

文体や様式についてのサンプルをできるだけ多く収集し、各ジャンルの特性を明確化させることである。特にこの時期の主流を占める「中間文化」を担っていく映画や週刊誌や新書を扱い、視覚メディアと文章との組み合わせがいかに関能していくのかを時代的に辿る。

(3) 1930 年代生まれの作家における文体的特質の解明

文学のカウンター性を意識する大江・三島・開高・石原と異なり、「内向の世代」の文学は、1960 年代半ばから中間文化とも切断了独自の位置を占めていく。小田切秀雄は彼らの文学を社会参加への距離から「内向の世代」と定めたが、申請者は、彼らの特徴は視覚メディアや商業的な文章に抗する実験的な文体の創出にあると考えている。これらの小説・評論の言説分析・テキスト論を時代的な文脈に位置づける。

## 3. 研究の方法

1960 年代に隆盛するグラビアを中心とした誌面が特徴的な諸雑誌を調査し、視覚偏重雑誌への文学者の関わりを考察する。さらにグラビア中心の週刊雑誌は、作家の探訪記事やインタビューや評論・エッセイなども入り込んでおり、その誌面構成や言説の周到な分析・考察も必要とされる。これらの作業からグラビア中心の週刊誌と文学とがどのような交渉を持つのかを検討する。

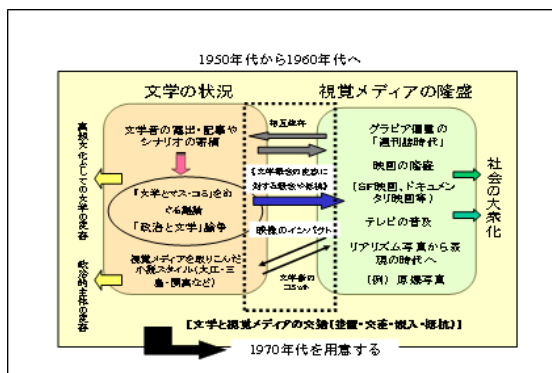
また、1960 年代の写真は、戦後の傷痕をどのように表現していくかが模索されつつ、経済成長とともに広告によって飛躍的に発達する。記録写真 (土門拳等) から撮影者の主体性が押し出される表現 (「VIVO」等) さらに広告写真へという写真史の流れは、文学のありようとも並行している。写真が発表・批評された雑誌を調査しながら写真をめぐる言説編成を分析・考察する。特に記録映画と文学の相互交渉についても調査し、考察を加える。これにより視覚映像や各種媒体に相応しい文体が作られ、文学が政治や広告の文章と親和 / 抵抗していく過程を辿る。

作家文体や様式を形成する際の各作家の文学理念を、雑誌記事を中心に調査し、彼らの文体形成にどのような詩や外国文学や翻訳が関わっているのか、研究の基礎をなす資料の発掘・整理を行う。前項の「研究の目的」で示した(1)(2)の媒体への寄稿の多い作家 (三島由紀夫・開高健・石原慎太郎・大江健三郎等) を中心的に扱う。彼らは皆全集刊行されているが、雑誌の記事やインタビューなどは全集に未収録の文章も多い。また、個別的な作家研究はそれほど緻密にされて

いない「内向の世代」(古井由吉・後藤明生・黒井千次・富岡多恵子等)については、同人誌に発表された初出雑誌に丁寧に当たり、各々の文学理念や先行文学の受容についておさえる作業を行う。

#### 4. 研究成果

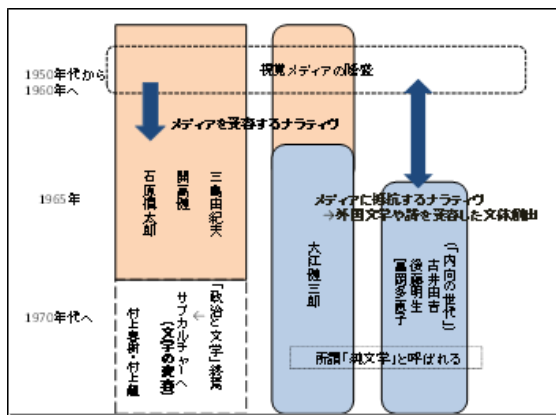
グラビア誌面調査および主な作家のルポルタージュや旅行記などの資料調査によって明らかにした1960年代の文学の傾向(下記【図1】を参照)を踏まえたうえで、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』(1965年)、『沖縄ノート』(1970年)、『核時代の想像力』(1970年)といったエッセイ・講演録、「性的人間」(1963年)、「アトミックエイジの守護神」(1964年)、『われらの狂気を生き延びる道を教えよ』(1969年)といった小説における文体的工夫の検討を行った。



【図1】1960年代の視覚メディアと文学状況の関係

特に、この時期の視覚メディアがもたらす「知的概観の世界」(三島由紀夫)に対抗すべく、大江はフランス文学の師・渡辺一夫が戦時中～戦後に力を注いだフランス・ユマニスムを深く受容し、1960年以降の核時代下の文学的営為の根幹に「人間」という語を据え、それを基にしたスタイルが模索されていったことを明らかにした。

また、1960年代の文学とニューメディアの複雑かつ重層的な「交錯」の調査・検討を基盤として、戦中期の太宰治におけるロマンチズム小説のスタイルや、戦後における原爆被災経験をどのように文学へと昇華させるかという困難をきわめる原民喜の詩や小説スタイル、1960～70年代の日本文学のスタイルを受容しながら、新しい形でベトナム戦争を小説化しようとした村上春樹の試みなど、テーマを拡張させた形での文体論についての検討し、口頭発表および雑誌論文にて公にした。(1960年以降の文学状況については下記【図2】を参照のこと)



【図2】1960年代以降の視覚メディアと文学状況

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

高橋由貴, 原民喜における詩と散文 小説「永遠のみどり」へ, 原爆文学研究, vol.14,2015, pp.83-94 査読無

高橋由貴, 『お伽草紙』の「浦島さん」と童話, 『太宰治研究』, 第23輯,2015, pp.35-44 査読無

高橋由貴, 大江健三郎のフランス・ユマニスム受容 『痴愚神礼讃』と小説的豊かさ, 言文, 61号,2014, pp.19-36 査読無

高橋由貴, 言葉ならぬ声を聴く鳥(バード) 大江健三郎『個人的な体験』論, 国語と国文学, 通巻1076号(第90巻第7号), 査読有,2013, pp.35-51, 査読無

〔学会発表〕(計11件)

高橋由貴, 村上春樹「午後の最後の芝生」における異界構造の秩序 小説を書く「芝刈り機」, 2016年代5回村上春樹国際シンポジウム, 2016.5.28, 淡江大学淡水キャンパス 驚声国際会議場(台湾・淡水區新北市)

高橋由貴, 大江健三郎のアメリカ体験 「アメリカの夢」から「狂気を生き延びる」文学へ, 日本比較文学学会2015年度東北大会, 2015.12.19, 盛岡市民文化ホール会議室(岩手県盛岡市)

高橋由貴, 大江健三郎の ユマニスム 「アトミック・エイジの守護神」論, 平成27年度日本近代文学会東北支部夏季大会, 2015.7.4, 米沢女子短期大学(山形県米沢市)

高橋由貴, 大江健三郎小説における動物オーデン、ガスカール、渡辺一夫, 日本比較文学学会第77回全国大会 《ワークショップ 物語という名の動物園 動物を通して語られる人間、自然、核時代》, 2015.6.13, 立命館大学衣笠キャンパス敬

学館（京都市）

高橋由貴，原民喜における詩と散文の往還 「永遠のみどり」論 ，第46回原爆文学研究会，2014.12.21，九州大学西新プラザ（福岡県福岡市）

高橋由貴，大江健三郎の映画観 『美しいアナベル・リイ』論 ，第5回現代日本映画-文学 相関研究会，2014.9.10，北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟（北海道札幌市）

高橋由貴，「風の又三郎」の気象学，2014年度福島大学国語教育文化学会前期学会，2014.5.2，福島大学M棟第一講義室（福島市）

高橋由貴，詩集『隻手への挽歌』と「無数のあの手この手」 "The Secret Muse" C・ハタケヤマから畠山千代子へ ，日本近代文学会東北支部平成25年度冬季大会，2013.12.23，仙台ビジネスホテル(宮城県仙台市)

高橋由貴，大江健三郎と映画 「性的人間」論 ，日本文芸研究会2013年度第2回研究会，2013.12.7，一関工業高等専門学校（岩手県一関市）

高橋由貴，大江健三郎におけるフランス・ユマニスムの受容 初期小説の形成から核時代観まで ，第四屆日本研究年會「国際日本研究の可能性を探る - 人文・社会・国際関係 - 」，2013.11.9，台湾大学（台湾・台北市）

高橋由貴，大江健三郎の沖縄経験 『沖縄ノート』における「日本人としての自己検証」 ，韓国日本近代学会第28回国際学術大会，2013.10.26，沖縄国際大学（沖縄県宜野湾市）

〔図書〕(計1件)

中村三春編 中村三春,佐藤泉,中川成美,萩原由加里,川崎公平,友田義行,横濱雄二,高橋由貴,宮本明子,志村三代子,米村みゆき,坂井セシル,雨宮幸明,井川重乃,本田みなみ,平野葵著,『映画と文学 交響する想像力』(「大江健三郎の映画観と小説 『臆たしアナベル・リイ 総毛立ちつ身まかりつ』論」),森話社,2016.pp.186-209

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

高橋 由貴 (TAKAHASHI YUKI)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：90625005